

創世記 7 章 1 － 16 節 「ノアの箱舟 2 戸が閉ざされる前に」

2025.10.12

昨日から少しずつ雨が降り始めていまして、今週いっぱい雨が続くそうです。毎日毎日雨がつづくと本当にいやな気持ちになります。私の父が、かつて小さな本を書きました。『ジュニアのはこぶね』というタイトルの本です。父が中学生の頃、雨が降って体育の授業ができなかった時に、当時の学校の先生が「今日はお話をしてあげます」とノアの箱舟の話をしたのだそうです。その経験が、この本のタイトルになったというわけです。父が若い時に聞いた、ノアの箱舟の話はとても印象的だったようです。後になって父が信仰をもつようになり、聖書の物語だと知るようになってようやく、その先生はクリスチャンであったかと気がついたようです。若い時、雨が降った時に、ノアの箱舟の話を聞いた。それは、父にとって衝撃的な話だったようです。だから覚えていたのだらうと思うのです。

このノアの箱舟の話は、教会に長い間来ている人にとっては、心に刻まれた聖書物語の一つかもしれません。聖書の中に出てくる動物がたくさん出てくる小さな子どもの頃から喜んで聞いた聖書の物語であるかもしれません。けれども、ここに書かれている物語の内容というのは実際には可愛い物語ではありません。壮絶な内容です。雨が降って、降って、降り続いて、人々がすべて死に絶えてしまうまで降り続いたという話です。呑気に聞いていることなどできない話です。

私事で申し訳ないのですが、約 20 年前のことですが私がドイツにいた時に、友人の学生と「梅雨」の話をしたことがあります。ドイツでは長い冬が明け、春を迎えて 5 月くらいになりますと、暖かい日が続きます。そうすると、学生たちなどは「やっと夏が来た！」と浮かれます。ある時、ドイツの友だちが私にこんな質問をしてきたことがあります。「日本でもこの時期は夏か？」と聞いてきたのです。それでわたしは、「日本では梅雨終わるまで夏が来たとはあまり言わない」と説明しました。すると、「その梅雨っていうのはなんだ？」と聞き返すので、「雨季のようなもので、雨が一か月くらい続くのだ」と答えました。「梅雨の時期になると、毎日雨が降いて、しかも湿度が高いので、本当に気が滅入ってしまう」などと私が言おうものなら、「じゃあ毎日雨が降くと、日本人はノアの箱舟の話は、ドイツ人よりもよく理解できるのではないか？」などというトンチンカンな答えが返ってくるのです。私が不思議な顔をしていると「だって一か月雨が降くんだろう？」と言うわけです。一ヶ月雨が降ると聞いて、彼はノアの箱舟の時のことをイメージしたようです。けれども、実際の梅雨の季節というのは一ヶ月ほど続きますが、別に雨が毎日降り続くわけではありません。自分が経験したことがないことというのはなかなか理解するのは難しいよう

です。

梅雨に限ったことではありません。台風が来る時もそうです。最近では長雨が続き、「線上降水帯」というのが起こって、その地域に大量の雨が降り続きます。最近も四日市あたりでは大雨のために車が何台も水没したというニュースが出ていました。そういう意味で言えば、雨が降るとノアの洪水の出来事を思い起こさせるということは、日本のような雨を経験することの少ないドイツ人に比べれば私たちの方が多いのかもしれません。9月、10月は台風シーズンなんていう言い方がありますが、梅雨の季節や台風シーズンの時のように、激しい雨が連日のように続けば、大変なことになるということは、この揖斐川、長良川、木曽川という川のそばで生活している私たちにしてみれば彼らより理解しやすいことなのかもしれません。大雨のために川の堰が切れてしまうなら、これは本当におおごとです。実際に、みなさんの中に以前の洪水のために家が水につかってしまうという経験をされた方もおられるかもしれません。

今日の聖書の個所ではこう書かれています。11節、12節をお読みします。

ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた。大雨は、四十日四十夜、地に降り続いた。

「大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた」。こう書くことによって、まるで天地創造以前、創世記1章7節にあった**「大空の下にある水と、大空の上にある水とが分けられた」**と記されていたはずの世界が、もう一度、すべての水に飲み込まれて、まるで、天地創造以前の状態である「茫漠」と書かれている時の状態にまで戻ってしまったかのように、描いているのです。それは、言うて見れば、世界はもう一度はじめからやり直ししなければならなくなつたと物語っているかのようです。雨は四十日四十夜という長きにわたって降り続けます。まるで、世界が再び水浸しになって、初めに状態に戻すかのように、これでもか、これでもかと降り続く。当たり前のことですけれども、それは川が決壊し、家が水浸しになった後も続くということです。家が飲み込まれ、すべてが水に飲み込まれてしまうのです。そう、まさに**「天の巨大なる水の源が張り裂けた」**と、言うほかないほどのすさまじさによって、世界のすべてが水に飲み込まれてしまう。世界はこうして、神にさばかれたのです。水によって世界は滅ぼされようとしているのです。このことは、その当時の人々にだけではなく、この出来事を耳にする者すべてに、忘れることのできない衝撃を与える神のさばきです。

神はノアに向かって言われました。**「あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生き物を地の面から消し去る」**と4節にあります。

「消し去る」と新改訳は訳しました。非常に強いことばです。「完全に滅ぼし尽くす」という神の強い決意が、この言葉の中に込められていることが分かります。けれども、この言葉の中に、神の悲しみが込められているのです。考えていただきたいのです。自分が一生懸命作ったもので、それも、本当に良くてきた！と喜んでいたものを、捨てなければならない時の痛みを。今年も、11月1日に教会のバザーがあります。皆さんいつも、このために本当によく準備してくれています。いつもケーキを作ったり、食事を作ったりしてくださる方の苦労は、本当に大変なことだと思います。そうやって一生懸命作ったものに、たとえば虫がついてしまった。あるいは、何か他の理由でだめになってしまって、せっかく作ったものを捨てなければならないとしたら、それがどんなに悲しいことでしょう。そして、もう一度作りなおさなければならないとしたら、その悲しみはどれほどでしょう。私たちが作るものであってもそれほどなのに、ましてや、人間です。動物たちやすべての生き物、この世界全てを滅ぼさなければならないのです。前回も、少し話しましたがけれども、6章の6節に「**主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。**」とあるとおりです。

神のさばきというのは、何よりも神ご自身が悲しんでおられる、心を痛めておられるということ、わたしたちは知らなければなりません。この神は、どこか高い所に坐して偉そうにしながら、まるでアリのひねりつぶすようにして、この洪水によるさばきをなさろうというのではないのです。

神の心は明らかです。本当ならばこの世界をさばきたくないのです。滅ぼしたくはないのです。救いたいのです。人を生かしたいのです。ただ生かすというのではなく、神が考えておられるように、生き生きと、喜んで生きることができるように生かしたいのです。人がこそそしないで、自信を持って生きることができる。後ろめたさなども持たずに生きることができる。そのような人生を、神は人間に与えたいのです。けれども、誰一人として、この神の心が分からないのです。神が考えておられる生き方よりも、自分で自分の人生を生きた方が、幸せだと思い込んでしまっているのです。人はどんどんと、自らの選択で破滅の道へと歩んで行っていることにすら、気がついていないのです。

宗教改革者カルヴァンはかつて言いました。「われわれは本来、日々ノアの洪水によって**神の前にほろぼされるべきものだ**」と。これは、むかしむかしのお話ではありません。今、私たちが、よく聞かなければならない物語なのです。今も、私たちはこのノアの時代の人々と全く何も変わらない生活を送っているのです。神がご覧になって、私の生活は大丈夫ですと、胸を張って生きることなどできないのです。これが、ノアの洪水の中心にある問題です。このノアの時代の出来事は、私の出来事、自分のことがここに書かれているのです。カルヴァンの言うように、「われわれこそが、日々、このノアの洪水によって神の前に滅ぼされなければならない者」なのです。

ここに、神の姿が示されています。神は、人々の罪をそのままにしておくことはできず、これは滅ぼしてしまおうと考えられるお方だということです。私たちの神は、人を救いたい

と願っておられるお方です。けれども、滅ぼすという選択も選ばれるお方だということを私たちは知らなければならないのです。なぜなら、ここに神の愛が示されているからです。もし、自分の子どもが悪いことをしても、怒らない親がいたとしたらどうでしょうか？最近、叱らない子育てという考え方があるようですが、これは気をつけなければなりません。もちろん、すぐに感情的になって当たり散らしてしまうような子育ては問題なのはいうまでもありません。しかし、本当に悪いことをした時に、叱るということがなければ、子どもは愛情を受け取ることができません。何をしても、何の反応もしないということは、無関心だということになってしまうのです。この無関心は、愛とは真逆のところにあります。

私たちの神は、私たちに無関心なお方ではありません。関心がありすぎて困るくらいです。けれども、すぐに介入して爆発してしまうのではなくて、神の怒りは、さばきというのは最後の最終手段です。こうして神のみ怒りを示すことを通して、神は私たちを愛していることをあらわされるお方なのです。

ここにも出てくる一つの面白い言葉があります。それが1節に出てくる「**神の前に**」という言葉です。この「神の前に」という言葉は、カルヴァンがとても大切にされた言葉でした。神が見ておられる、ということです。カルヴァンは、「神だけが人の生き方が正しいかどうかを評価できる唯一の審判者である」と、このところで言いました。その神は、ご自身の目でノアをご覧になります。

1節。主はノアに言われた。「あなたとあなたの全家とは、箱舟に入りなさい。この世代の中であって、あなたがわたしの前に正しいことが分かったからである」

神はここでノアのことが「正しいと分かった」と書かれています。以前の第二版では「見たからである」と書かれていました。元々のヘブル語は「見た」「ライーティ」という言葉が使われています。神はノアを、神の前に正しいと見られたのです。しかし、そこで私たちは思います。人間の生き方を評価することのできるただ一人のお方から見て、「正しい」と見られる生き方とは、どのように生きることなのかと。神がこのノアをこの人は正しいと見られたということです。実はこれが、宗教改革者たちが語った、義と認めるという、義認の教理なのです。神は、ノアを見られて義と認められたのです。ドイツの旧約学者は、この「見た」という言葉を、「神は将来において見ている」ということだと理解しました。この言葉は、サムエル記第一の十六章一節で同じよう使い方がされていると言います。ここには、イスラエルに最初に建てられた王サウルが神から離れてしまい、そのことを悲しんでいる預言者サムエルに対して、神がダビデをサウルに代わって次の王として任命する時のことが記されています。お読みいたします。サムエル記 第一 16章1節です。

主はサムエルに言われた。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」

ここで最後に「見出した」となっている言葉と同じ言葉が、このノアのところに使われて

いると言うのです。これは、ただ「見つけた」という意味だけではなくて「将来、を見据えている」という意味が込められています。また、同時に「発見した」という意味も込められています。

神はノアを発見します。そして、この男は、これから新しい将来を託すことができる人物だと見られたのです。これは、ノアのこれまでの歩みである、過去だけを見られて正しい、あなたは義人だと宣言しているのではないということです。そうではなくて、神は、ノアの将来をも見据えておられるのです。神が義と認めるといのは、そのような意味があると言うのです。

ノアは完全な人間で、これまでの、過去の行いが正しかったから、神が義と認められたということではなかったのです。それは、この後、続いて読んで行けば分かりますけれども、ノアは完全な人間ではありませんでした。失敗も犯す、過ちを犯すこともしているのです。将来においても失敗をしているのです。ダビデも同じです。ダビデも何度も失敗をくりかします。神はそのダビデの将来を見据えながら終えらびになられたのです。このように不完全さを持つノアであっても、神はこのノアの将来全体に対して希望を持ったのです。ここに、私たちへの慰めがあるのです。

神はわたしたちの過去のこととしてしまったことだけに、目を留めておられるのではないのです。そうではなくて、わたしたちの将来をも見ていてくださる。失敗することもあり得る将来をご覧になりつつも、この人は大丈夫だと見据えていてくださるということです。ここに、神の救いの意味があるのです。神が私たちを救われるのは、今の私たちを義としてくださるというのは、私たちの将来をも、義としてくださるということです。

私たちは金曜日にオンギジャンイの方々をお迎えしてコンサートをいたしました。この笠松教会いっぱい人が集まってくださいました。そこで、一人の女の方が証をしてくださいました。彼女は今回9年ぶりにオンギジャンイのメンバーに加わったそうです。その間に色んなことがあったそうです。賛美のグループに入ったのに、その後都会に出て一人の生活しているうちに心の寂しさを埋めるために、この世のものを求めるようになったそうです。そして、一人の人と出会って、子どもが出来て、結婚生活がはじまったそうです。ところが、この男の人と一緒に生活してみると、自分に話していたような人物ではなくて、仕事もしないで賭け事ばかりする人だったそうです。子どもが生まれるために仕事もやめたけれども、ご主人は仕事をしないで、自分を騙して、賭け事ばかりしていたのだそうです。子どもが生まれても、何も買うことができず、本当に苦しい日々が続く中で、「神様がおられるならどうしてこんな苦しいことがあるのか」と神様に毎日叫び続けていたそうです。

「自分は一体何をやっているのか？自分が思い描いていたのはこんな生活だったのか？」そう自問自答する中で、少しずつ信仰が回復していったという証でした。

自分が憧れていた賛美宣教の歌手になったのに、自分のその後の歩みは悲惨なものとなってしまったのです。信仰に生きるようになって、立派な、胸を張って生きることができる

ような生活を誰もが進むわけでもないのです。けれども、そういう失敗を通して、神はそ
の方の手を離さず、守り続け、もう一度信仰へと立ち返らせてくださったのです。

それが、「神が見られる」ということです。神の前で義と認められるということです。そ
れは、失敗しない人生を歩むということではないのです。

神は、私たちの将来をご覧になっておられて、私たちのことを全て理解した上で、私たち
を義と認めてくださるのです。私たちの主は、私たちのことをよく知っておられるお方です。
知っておられて、その上で私たちを受けいれてくださるお方なのです。

今日の聖書の箇所は16節までですけれども、ノアは動物をそれぞれ箱舟に入れたところ
が書かれています。2節ではきよい動物は七つがいつ入れるようにと書いてあります。
ところが、9節では**「雄と雌がつがいになって箱舟の中のノアのところにやってきた」**と書
かれています。以前の第二版では**「雄と雌二匹ずつが箱舟の中のノアのところにはいつて来
た」**となっていました。前回の6章の20節でも「それぞれ二匹ずつ」と書かれていました。
箱舟に入ったのは七つがいなのか、二つがいなのか、ちょっとはつきりしません。祈禱会な
どでは丁寧に説明しているのですが、ここではあまり時間がないので説明できません。ただ、
簡単に言うと7章の前半部分はとても丁寧な説明がなされているので違うということです。
動物の役割によって集められる数が違ったようです。

他には、ここはいろいろお話ししたいことが沢山あります。たとえば動物はノアたち家族
がかがしたのか、自分たちで集まってきたのかなんてことが書かれています、ごめんなさ
い時間の関係で諦めます。ただ、大切なので心に留めてください。

今日、最後にここで目を止めたいのは16節の最後の言葉です。

「それから、主が彼のうしろの戸を閉ざされた」と書かれています。この何でもなような
書き方の中に、神の決意が込められているのを読み取ることができます。神が戸を閉めたの
です。神が閉めたということは、その後は、どうあがこうとも、開けることはできないとい
うことです。戸が閉められてしまうと、もう後戻りはできません。といっても、そのあとは
ひたすら雨が降り続けるばかりです。このこれからどうなるかまったく誰にも検討もつか
ない状況に陥るのを、ノアたちはただ神様に委ねることしかできないのです。

先ほどお話しした、オンギジャンイの方は証をしたあとで「ヨケベデの歌」という賛美を
しました。これは、エジプトの中で奴隷生活を強いられていたイスラエルの民が、あまりに
も多く生まれすぎて、エジプトの脅威になったためにエジプトの王は、生まれた男の子を殺
害するよう命じます。けれども、ヨケベデはカゴを編んで、そのカゴの中に水が入らないよ
うにして、赤ちゃんを入れて、川に流します。この時の母親がどれほど苦しい思いでその決
断をしたらろうかという、この時のヨケベデは、神に委ねるしかないなかでの母親の苦闘の
祈りの歌です。とても素敵な歌でした。

ここでのノアも全く同じです。もう自分たちにできることは何もない、ただ神に頼るのみです。でも、明らかなことがあります。ノアは、扉が閉められる前に神はすべてを備えてくださっていたことを、すでに体験しているのです。箱舟を作り上げるのは大変な苦勞だったことは間違いありません。けれども、動物を集めるのはもっと大変だったはずですが、動物たちは主が集めてくださいました。そして、これまでの間に、ノアは誰もこれまでやったことのない大きな船を作り、動物園を船の中につくり、その準備はすべて神にとって支えられてきたのです。だから、きっと戸が閉じられた時には、神におゆだねする心は決まっていたはずなのです。というのは、これは神の救いのわざなのだとすることをノアは知っていたからです。

神は生きておられるお方です。そして、人の人生に加入なさるお方です。時には厳しく、時には非常に大きな愛で包み込んでくださることによって、その愛を示してくださいます。このお方は、すべてを見通しておられます。だから、私たちはこのお方に託すことができるのです。それは、一か八かの賭けではなく、大きな信頼の中で委ね切ることのできる安心感があるものです。

これが、信仰なのです。かつて、東京の銀座教会で牧師をしておられた渡辺善太という牧師は、この信仰をこう表現しました。「暗黒への飛び込み」と。

信仰とは、その先がまっくらな暗黒のような暗闇であっても、その先に神の御手があると信じて飛び込むことができるものなのだと。

主の御手の中には、すべての安心が詰まっているのです。だから、私たちはこのお方に身を委ねることができるのです。

お祈りをいたします。